
春夏秋冬

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬

【Zマーク】

Z6901Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

とりあえず、短編集です

『春』『夏』『秋』『冬』

それぞれの季節の中でつづりめしていく恋心・・・。

『外』 外壁の雪のようす

ちいさらと・・・

雪が降つてくる。

東京では珍しくついに降る。

「ねえ、新一。」

「これだけ降ればつもるかな?」

窓にへばりついて聞く蘭に

新一は呆れた声を出した。

「いや、溶ける。」

「えへ、なんでー?」

「雪は地温が低くなつてからつもるんだ。」

まだ、地温があたたかい東京ではつもられないよ。」

「でも、アスファルトってすぐ冷たくなるじゃない。」

「アスファルトは冷たくても、

中の土があたたかつたら意味ねえんだよ。

その土があたたかいせいで溶けるんだからな。」

「ふーん。

じゃあ、今年のホワイトクリスマスは期待できないね。」

残念そうにしつぶやく蘭。

「つたぐ、本当に女つてーのは
ロマンチックなのが好きだよな。」

「そりゃそうよ。

だって、見てるだけで心が癒される気分になれるでしょ?」

「気分ね、気分。」

「新一の場合、気分もなにもないわ。」

一応、言つておぐが

今年付き合い始めた2人・・・・。

それでも以前と変わらず喧嘩。

「和葉ちゃん、新一が紳士的だとか言ってたけど
どうぞ見たらそう見えるんだろ?
私には不思議でたまらないわ。」

「嫌味か、それ。」

「ひあね、そう聞こえるんだつたりやつなんじやないの。」

「おめーなあ。」

「大体、こんなに雪が降つてて感動しないなんて
信じらんない。」

「なんとでも言え。」

「・・・コナン君だつたときは、一緒に喜んでくれたくせに。
新一の格好つけ。」

「あのなあ、あれは子供のフリをしてたからで、
本氣で喜んでたわけじゃねえよ。」

「わかつてるもん、そんなこと・・・。
でもなあ、新一最近意地悪だし。コナン君だつたときのせつが良
かつたかも。」

「冗談のつもりだった。」

「んじゃあ、戻つてやるつか？」

「え？」

「さつき灰原にもらつたんだよな。
これを飲めば戻れる・・・って。
ただし、もう一度とこの姿には戻れない。
まあ、蘭が望むならそのほうがいいかもな。」

新一は蘭に微笑みかけて薬を飲んだ。

「ちょっと、冗談なの！」

さつきのは冗談！出しへ、出しへよ！
やだよ・・・確かに、口ナン君との思い出に漫りたいて思ひこ
ともある。

でも、私が好きなのは新一だもん！」

「え？」

「やーっと、本音を囁いたな？」

新一はムクリと起き上がる。

「ちなみに、さつき飲んだのはただの栄養剤。
もう一度毒薬作るなんてあぶねーこと、
灰原はもう一度としねえよ。」

「・・・よ。」

「え？」

「なによ、なによ！
本気で心配したんだから！
新一のバカ！」

「わ、わり・・・」

「あ、謝つて許される問題じやないんだからね・・・
新一、今日のお夕飯抜きなんだから。」

「はあ？そりやねえだろー。」

「知らないわよ。」

「私をだました新一が悪いんでしょ？」

「大体、お前がコナンが良いとか言つのがいけねえんだろー。」

「なによー、全部私が悪いって言いたいのー?」

外の雪のように・・・

2人の喧嘩はやまなかつた。

『外傳』 外傳の書のよひ……（後書き）

とつあえず・・・

『春夏秋冬』といつ題名をつけたかつた
桜桃です。

なんか、フツとひらめいた題名だつたんですね。

使いたくて使いたくて・・・

うづくづきました。

そして、今回！

短編集として書かせていただくことになりました。

皆様、宜しくお願い致します！

『外』　あつたまるから・・・

夏の暑さが嘘のよつて冷え込む口が続く。

東京の冬がこんなにも寒いのなら・・・

北海道の冬はどれだけ寒いのだらけ。

「哀ちゃん?」

「畠田さん・・・

「何か考え方?」

「ええ・・・まあ。」

「・・・哀ちゃんって!!ステロイドだよねえ。」

「え?」

「不思議な雰囲気でさ。

それが、哀ちゃんの魅力なんだけどね！」

につこり笑う歩美に

つられて哀も笑う。

「哀ちゃん、コナン君が居なくなつて……もう、一年だね。」

「そうね・・・」

「寂しいね。」

「ええ・・・」

「哀ちゃんは・・・」「ナン君が好き、だった？」

「え・・・・?」

「一年生のどや・・・同じような質問、したね。あのときと・・・気持ち、少しさは変わつてない?」

「あの時と……気持ちが？」

「うん。

歩美はね、少し……変わったよ。
大好き、「コナン君！」じゃなくて……
少し、大人目線で見れるようになつたと思つ。」

「大人……」

「絶対結ばれる！

つていうただの空想を浮かべるだけじゃなくて……
なんか、普通に……好きだなあ。つて。」

胸に手を置いて、歩美は話す。

「コナン君が……好きだなあ。
つて……思つたら、ほんのり心があつたまるんだ。」

「……そう。」

「コナン君つてさ……
ココアみたいだよねえ。」

「え？」

いきなりな言葉に哀は聞き返してしまった。

歩美はポケットから自販で買ったココアを2つ取り出す。

「さつきね、買ったの。
あつたかいよ。哀ちゃん、どういへ。」

「・・・ありがと。」

歩美は哀に渡すと缶を開けて、

飲み始める。

哀はそつと、ココアを握りしめた。

「ま、ひ、・・・

「『アツ』て飲むと優しい気持ちになるでしょ？
やつと・・・心に寄り添つてくれる。

「ナン君つて、そんな感じじゃない？」

「・・・やうね。

一番悲しことき・・・傍に居てくれるわ。

「うん。

「ナン君つてずるい・・・」

「私もそう思つわ。

勝手に人の心を盗んでほしくないわよね。」

「うんうんー！」

「ま・・・それは勝手な言ひ分でしょ！」など。

「・・・うん。

哀ちゃん・・・」

「なに？・」

「歩美、哀ちゃんの傍つていいよな？」

「え？」

「哀ちゃんまで、『ナン君と回じよつ』になくならなによな？」

「畠田さん・・・」

「歩美、哀ちゃんみたいに居たいから・・・」

「・・・ありがとうございます。」

「心配しなくても、私はどこも行かないわよ。」

「よかったです・・・」

胸をなでおろしたようにホッとする。

「哀ちゃんみたいに頭が良かつたり・・・
外国に行つたりしちやうのかな、つて不安だったの。」

「・・・」

「ずっと親友で居てくれるんだよね?」

「ええ。」

哀の答えを聞くと

歩美は嬉しそうにまた笑つた。

『冬』　あつたまるから・・・（後書き）

恋話なのか・・・友情話なのか・・・

全然わかりませんが・・・

読んでくれてありがとうございます！――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6901y/>

春夏秋冬

2011年11月26日19時46分発行